

廖継思著『徳聰の履歴書』

— 清国人・日本人・中華民国人だった一人の台湾人の履歴書より —

中 田 敏 夫
廖 継 思

はじめに

廖継思氏はかつて琉球新報に「三たび変わった国籍 母語教育を断たれた悲哀」という文を寄せている（1997年5月9日付け）。ここで氏は「台湾万葉集」（孤蓬万里編著、集英社1994年）にある「宿命かフォルモサの民一生に三度の国籍変ふるもありて」（呉建堂）を引用し、「この歌の通り、一生のうちに自己の意志に関係なく三度も国籍を変えさせられた人は少なくない。現に、私の父は、1891年（明治24年）清国人として生まれ、4年後（1895年）に日本人となり、1945年に中華民国人と、三度も国籍が変わった」と亡父廖徳聰氏について記している。印象的だったのはこの文に続く「もう一度台湾国人になることを願いつづけていたが、とうとうその望みを実現する機会はなく、永眠した」という父の無念を伝えることばだった。

本稿は、廖継思氏が綴った父徳聰氏の伝記（草稿）を公にするものである。廖継思氏は作家でも歴史研究者でもない在野のかつて「日本人」でもあった台湾人のお一人である。「個人一生の事績を中心とした記録」（広辞苑）を「伝記」とするならば、徳聰氏は特別に歴史上名を残しているわけではないが、その生涯を、子息継思氏が叙述したこの文章は「伝記」と呼べよう。清国時代から日本時代、そして中華民国時代を走り抜けた一人の台湾人の事績を見事に描いている。

社会学では、「ある特定の個人によって語られた、あるいは書かれた資料、すなわちインタビューや自伝、日記などに焦点を当て、それらに対する多角的な検討を行うことにより個人の経験や生涯を再構成しようとする手法」をライフ・ヒストリー研究という（注1）。この研究における中心資料が「ライフ・ストーリー」であり、「ライフ・ストーリーとは、インタビューや自伝、日記など、個人が自分自身の生涯、生活や仕事に関して語ったもの、あるいは書いたものである。つまり、ライフ・ストーリーは、個人が主観的な立場から自身の経験や生涯を再構成したもの」と規定される（注2）。ただ、既に他界している人物にその手法を用いることは不可能である。そのときに、伝記はライフ・ストーリーに代わる個人史研究・歴史研究の一形式として機能することも可能ではないだろうか。ただしその伝記に、対象人物の性格や生涯に彩りを意図的に強調することで物語的な要素が加味されるとしたら、それは個人史・歴史研究の一形式としては認めが

たいものになるだろう。廖繼思氏の文章は、父により残された履歴書・種々の草案・辞令等の公文書、幼い頃から成人するまで記憶してきた雄弁な父の語り、父の回りの人物・親類縁者・関係者から聞き知った情報などをもとに、父徳聰氏の生涯にわたる行動や業績を客観的に記述したものとなっているといえる。履歴をつぶさに示す本人執筆の記録（写真1・2参照）を元に、一番近い存在である子どもの目を通し、回りの情報をつなぎまとめた資料という意味で、「子どもの主観的な立場から身近な父自身の経験や生涯を再構成した」伝記的なライフ・ストーリーと言うことも可能かと考える。

廖繼思氏が『徳聰の履歴書』として父の事績を記録にとどめたのは、父と自分、そして自分の子ども・孫へと廖家が時代と共に流れていくとき、清国人として生まれ、日本人となり、さらには中華民国人として生きてきた父の歴史を確認し、共有したいという思いであっただろうか。そして、「その父が、晩年よく言っていたことがある。教育とは、親から子へ、子から孫へ、母語で教えていくのが最も自然で効率がよいのだが、吾々は何代もそれができなかった。これは悲哀以外の何物でもない、と」(前出琉球新報)と語っていた父の思いを家族を含め、全ての台湾人へ伝えなかったのではないだろうか。

必ずしも歴史上に残る業績があったわけではないが、家族のため、地域のため、台湾のために時々をためらいながらも真剣に生きてきた一人の台湾人の歴史は、多角的な検討により、多くの示唆を得る資料・証言にしうるものと考ええる。そのような観点から、本稿では『徳聰の履歴書』を公にする。その本文の前に、廖徳聰氏、廖繼思氏の簡単な履歴を紹介すると共に、徳聰氏が歩んだ国語学校入学から、卒業後の教員への道、その職を辞していく過程の記述をめぐり、日本統治初期の台湾の教員養成に関わって、経費関係を中心に資料整理をしておく。

1. 廖徳聰氏について

廖徳聰氏については『徳聰の履歴書』に詳しく記されるが、ここで概略紹介する。

廖徳聰氏は、明治24年11月11日、台中州大屯郡西屯庄上石碑生まれの男性である。国語学校入学までの経歴には不明な点が多いが、台中廳西大墩公学校を明治42年卒業している。第一回目の卒業生で、この年の卒業生はたった3人だった。公学校は都合6年の在校だったと考えられるが、入学の年齢、卒業の年齢は正確にはわからない。卒業後、全寮制の台中農事試験場の講習班に入り、一定期間そこで学んだようである。一方、国語学校入学は、当時国語学校師範部の修業年限は4ヶ年であったので、大正2年（22歳）卒業であることから逆算すれば、入学は明治42年（18歳）だったものと思われる。すると、公学校卒業と同時に国語学校入学となってしまう、農事試験場講習班就学という話はどう理解していいのか、この辺りは不明である。仮に徳聰氏の公学校在学が4年だったとすれば国語学校入学までの期間に農事試験場で講習を受けていた可能性もあるが、公学校卒業年と国語学校入学年の重なりは説明がつかない。

徳聰氏は大正2年3月25日国語学校公学校師範部乙科を卒業し、同年3月28日台湾公学校訓導の免許を取得し（写真3参照）、同年母校である西大敦公学校に奉職する（写真4参照）。大正6年台湾総督府文官普通試験に合格したり、各種学事講習会で講習を重ねるものの、6ヶ年公学校に勤めた後、大正8年4月1日退職する（写真5参照）。給費生の服務義務の3ヶ年をさらに3ヶ年越えたところでの退職である。その後は、信用組合書記、西屯庄助役・副議長、会社員（事務系）などに勤めたが、教育機関に関係することはなかった。

2. 廖繼思氏について

廖繼思氏が2010年上梓された『いつも一年生』（台北市台中一中校友会文教基金会）によれば、氏のプロフィールは次のようである。

1924年生まれ。台中一中第23期卒業後、千葉医科大学附属薬学専門部を経て、ライオン油脂株式会社、薬局管理薬剤師、商業高校教師、製薬会社などに勤務。引退後翻訳に従事、その間、自伝、郷土、エッセー、旅行記など各種雑文多数を書いた。翻訳書に『CDA II』及び『護用薬理学』（中国語訳）がある。

『いつも一年生』は、継思氏自身による「個人が自分自身の生涯、生活や仕事に関して語ったもの、あるいは書いたものである」ライフ・ストーリーとなっている。昭和5（1930）年の公学校入学から話は始まり、中学、浪人、薬専の学業時代、サラリーマン、薬剤師、教師、製薬会社勤務の職業時代までを、「序」の許秋滄氏によれば「独特かつ細やかな観察力と流暢な日本語で、この激動の時代を生き抜いた庶民の生活をつぶさに書き留めているので、正史には現れない歴史の裏がみえてくる貴重な記録が多く含まれ」た一書としてしあがっている。

なお、中田は氏との縁で、中田（1997）、中田（1998）、中田・廖（1999）などの研究成果を報告している。

3. 徳聰氏の教育関係の経歴

ここでは徳聰氏の公学校時代、台湾総督府国語学校時代、教員時代など、教育関係の経歴について、経費を中心に資料整理をしておく。徳聰氏の履歴をみていくと、国語学校入学の際の学資問題、卒業後の職業選択に興味深い記述がみられる。徳聰氏は、公学校卒業後国語学校進学にあたり、祭祀公業で資金援助を受ける。当時、国語学校で学ぶ際の総督府の負担する学資支援の制度はどのようになっていたか、また、その恩典を受ける代わりに服務はどのようになっていたのか、そのあたりの客観的状況を知ることが徳聰氏の履歴を理解する上で必要だと考えるからである。

3. 1 徳聰氏入学の頃の公学校

徳聰氏が台中廳西大墩公学校を明治 42 年卒業したという記録は残っているが、入学の年齢は不明である。明治 31 年台湾公学校令（勅令第 178 号）が公布され、国語伝習所にかわる台湾人の初等教育機関として 6 年制の公学校が設置された。その後、明治 40 年公学校令の全面的改正（律令第 1 号）が公布され、修業年限 6 年は「民度の低い村落地方では長きに過ぎ」ということで（注 3）、公学校規則中改正（府令第 5 号）により、公学校によっては 4 箇年の短縮が求められた。この中には台中廳西大墩公学校が含まれていた。ただ、「現在第五学年第六学年の児童は、其の卒業に至るまで尚之を收容し置き、四十三年度に於ける第三学年の児童より修業年限四箇年制を実行する事」（注 4）とされたので、徳聰氏は従来の 6 箇年制での卒業と考えられる。したがって、入学は明治 36 年、12 歳以前となる。明治 31 年の台湾公学校規則では年齢 8 歳以上 14 歳以下となっていたので、12 歳での入学も可能性としては考えられる。ただし既に触れたように、徳聰氏の台中農事試験場講習班の時期を勘案すると、6 年間の在学が不確かなものとなる。公学校規則が村落地方を中心に修業年限を 6 年から 4 年に切り替えるに至る前史的な実態が地方で起こっていた可能性もある。徳聰氏は 6 年の修業年限を終えずに農事試験場での講習に就いたが、この講習時期を公学校修業年限に加算して、公学校卒業と見なされ、結果卒業資格を得、卒業名簿に記載されると同時に国語学校入学の資格を得たのかもしれない。

明治 31 年公学校令発布当時は「僅かに五十五校、二千四百の生徒に過ぎなかったが、明治四十年には実に百九十二校、三万四千四百の生徒数」となっていた（注 5）。年々公学校入学者数の増加が見て取れるが、しかし、入学した者が必ず卒業していたわけではない。ひとつの資料によれば、明治 35 年第一学年入学者 10358 人のうち、卒業の年になる明治 41 年卒業者は 968 人、9.34% の卒業率となっている（注 6）。これは徳聰氏の卒業の前年のデータであり、氏の卒業の頃もほぼ変わらなかったであろう。氏の卒業の同期がたった 3 人だったというのは、それなりに妥当な数だったと思われる。このような低い卒業率について、「惜むらくは半途にして退学する者も亦尠からず。而して其の退学の事故、多くは家事上の関係なりと雖も、成業の見込なくして退学せしめらるる者、総数の二割に近きものあるは誠に驚くべし」（注 7）というような指摘がされるところである。逆に言えば、卒業に至った徳聰氏の場合、家事上の不都合や、能力的な不足がなく、一定の経済力のある家庭に育ち、能力的にも秀でていたことをうかがわせる。

3. 2 徳聰氏入学の頃の国語学校

徳聰氏が公学校卒業後入学した台湾総督府国語学校師範部乙科の入学資格は、明治 35 年 7 月国語学校規則中改正によれば、「年齢満十五歳以上二十三歳以下ノ本島人ニシテ公学校卒業以上ノ学力アル者」（明治 38 年の改正で入学年齢は 14 歳からとなる）であり、徳聰氏はその条件を満たしていた。

さて、一割に満たない公学校卒業生の進路は当時どうなっていただろうか。

明治 37・38・39 年の公学校卒業生全 1112 名中の進路が示された資料がある（注 8）。

「官庁に就職者」51 名、「教員たる者」51 名、「高等学校に入学者」304 名、

「実業に従事する者」246 名、「補習しつつある者」146 名、「諸務に従事の者」

23 名、「其他」247 名、「死亡」10 名

この資料から、「高等学校に入学者」が全体の首位にあること、また高等の学校に入るために「補習しつつある者」も相当数にのぼることがわかる。進学のための比率があわせてほぼ 4 割あることになる。これについて同資料では、「彼等が母国的教育に依りて得たる智識を以て、自己の発展を企図する者多きに依る」とするが、当時公学校を卒業しきだけの家庭的な理解、経済力などを持った子弟はより高い社会的経済的地位を得るための進学を考えたということになる。徳聰氏がなぜ国語学校を選んだかは不明だが、当時の公学校卒業生のほぼ 4 割が進学を考えていたとすれば、標準的な選択の一つであったと理解すべきかもしれない。

3. 3 国語学校の経費

ところで徳聰氏の進学にかかって、経費はどうなっていたのだろうか。『徳聰の履歴書』には次のようにある。

国語学校には合格したが入学するについては、学資という難題が立ちはだかっていた。国語学校は全寮制で学費も官費だったが、やっぱりいろいろな費用がかかるので、ある程度工面しなければならない。祖父は僅かな田地を持っていたが体が弱く、耕作の仕事もできないから大叔父に貸しているくらいで、とても 30 円という大金は捻出できない。結局一族の祭祀公業から借金してようやく進学することができた。

徳聰氏の実家は西屯庄において特別の資産家でもなく、名家というわけでもなかったということであり、氏は国語学校入学に当たり、西屯庄の「廖家」の「祭祀公業」（同姓の祖先を祀るための団体）に 30 円という大金を奨学金として借り進学することになった。想像するに、徳聰氏は優秀な青年であり、その才能は村（庄）でもよく知られ、村の代表として廖氏を台北に送り出したのだろう。徳聰氏のような進学は国語学校入学生徒のひとつの姿を示しているものかもしれない。特別な資産を持たない地方の優秀な人材が、郷土の同姓による相互扶助をはじめとした地域の応援により進学がかなうというものである。ただし前述の通り、徳聰氏が公学校を卒業できること自体、廖家が相応の経済力があつたことはいうまでもない。

本文に「国語学校は全寮制で学費も官費」とあるが、この点を整理しておく。

明治 29 年府令第 38 号台湾総督府国語学校規則により、これまで開設されていた芝山巖学堂は台湾総督府国語学校となり、国語学校内に師範部が設置された。これは、年齢 18 歳以上 30 歳以下の内地人が対象であったが、国語学校には師範部と同時に語学部が設置され、本島人にとってはじめての高等普通教育となる国語学科が設けられた。語学

部国語学科は国語学校付属学校または国語伝習所卒業以上の学力を有する本島人に入学資格を与えていた。修業年限は初め3箇年であった。ところで明治29年9月勅令第305号「台湾総督府国語学校同附属学校及国語伝習所生徒学資金及旅費日当支給ノ件」によって、生徒への給費原則が定められた。

台湾総督府国語学校同附属学校及国語伝習所ノ生徒ニハ其ノ種類ニ依リ学資金及旅費日当ヲ支給スルコトヲ得其ノ支給細則ハ台湾総督之ヲ定ム

これを国語学校規則では次のように定めている。

第29条 師範部ノ生徒ニハ其学資ノ全部ヲ支給シ語学部ノ生徒ハ給費自費ノ二種ニ分チ給費生ニハ其学資ノ幾部ヲ支給スルモノトス

第30条 授業料ハ総テ之ヲ徴収セス

これより、師範部の生徒には学資給費が完全になされると同時に、授業料は無償であり、旅費に関しても手当てされたことがわかる。ただこの規定時では師範部生徒は日本人に限られ、台湾人が入学し得た語学部は「給費自費ノ二種」に分かたれていた。台湾総督府国語学校師範部は、明治35年7月、甲科（内地生）と乙科（本島生）に分設され、中学部（内地生）、国語部及び実業部（本島生）が置かれることになる（府令第52号台湾総督府国語学校規則改正）。この乙科の誕生によりはじめて、公学校の訓導という制限付きだが台湾人の教員養成が実現することになった。学資支給については、明治29年勅令第305号を受けて、

第25条 師範部ノ生徒ニハ別ニ定ムル所ノ規定ニ依リ其学資ヲ支給シ（中略）給費生ニハ同上ノ規定ニ依リ其学資ヲ支給ス

とある。この規定は、師範部の生徒であれば、甲科（内地人）乙科（本島人）の別を設けず学資支給を認めたものである。つまり、日本人、台湾人の違いによる学資給費ではなく、師範部であることに対する支給であった（注9）。中学部、そのほか各学部（国語部、実業部）は給費、自費に分けている。また、授業料についても「第六章授業料」に中学部の記述があるのみであることから、師範部は徴収しなかったものと思われる。

徳聰氏は明治42年師範部乙科の入学であるので、学資支給はなされ、また授業料も徴収されなかったことになる。このような条件が公学校卒業後、4割程の進学を希望させた理由のひとつになっていよう。ただし、地方から都会台北で就学するにあたっては諸費用がかかったであろう。そこを祭祀公業が救ったのである。

3. 4 訓導職の服務義務について

徳聰氏は大正2年3月25日台湾総督府国語学校師範部乙科を卒業し、その3日後に台湾公学校乙種訓導の免許を取得し、大正2年3月31日付で西大墩公学校訓導に任じられる。その後、大正8年4月1日依願により公学校訓導を辞職することになるが、この間6年の公学校勤務だったことになる。

師範学校生は学資支給などの恩典を受ける代わりに、卒業後の服務義務も求められた。

明治 29 年の国語学校規則における服務規定は次の通りである。

第 31 条 給費生ハ卒業証書受得ノ日ヨリ三箇年間ハ民政局長ヨリ指定ノ職務に従事スルノ義務ヲ有ス但特別ノ事情アリテ民政局長ノ許可ヲ受ケルタルモノハ此限ニアラス

明治 35 年国語学校規則の改正（府令第 52 号）によっても、この服務年限は踏襲されたので、徳聰氏が国語学校入学にあたってはこの 3 箇年間の服務年限が求められたことになる。

第 26 条 給費生ハ卒業証書受得ノ日ヨリ三箇年間ハ台湾総督ヨリ指定ノ職務ニ従事スル義務ヲ有ス

しかし、徳聰氏は服務年限を 3 年越えて、実際には 6 箇年勤務した。国語学校師範部はその後、師範部甲科が小学師範部及び公学師範部甲科に、師範部乙科は公学師範部乙科に改正され（明治 43 年）、さらに大正 8 年台湾教育令の公布の結果、台北師範学校となる。この大正 8 年 1 月 4 日公布の台湾教育令が「台湾人に対する学制の確立を目標として出来たもので、教育史上画期的意義をもつ」ものとすれば（注 10）、国語学校から師範学校へと改編される教育的なひとつの時代の節目にあたり、徳聰氏は新しい人生の一步を踏み出す決断をした契機となったとも考えられる。大正 8 年 4 月 1 日は、台湾公学校訓導廖徳聰に対する台湾総督府の「依頼本職ヲ免ス」の辞令日であり、台湾総督府師範学校官制（勅令第 65 号）が公布された日でもあった。

なお、国語学校とは別系列で、台湾総督府師範学校（台北師範学校・台中師範学校・台南師範学校）が本島人を対象にした公学校訓導養成の機関として設立されていた。この服務年限は、台湾総督府師範学校規則（明治 32 年 4 月 13 日府令第 31 号）によれば、10 箇年間であった。内地人を対象として始まった国語学校と本島人を対象とした師範学校とで服務年限に差を付けたことが知れる。

第十六条 入学生徒ノ資格ハ漢文ニ通・曉シ且官立学校若ハ公学校ヲ卒業シ又ハ之ト同等以上ノ学力ヲ有スル本島人ニシテ在学中家事ニ係累ナク卒業ノ日ヨリ十箇年間教職ニ従事スル誓約ヲナシ得ルモノタルヘシ

第十九条 生徒ハ卒業証書受得ノ日ヨリ十箇年間ハ知事庁長ヨリ指定ノ学校ニ服務スルノ義務ヲ有スルモノトス

3. 5 訓導職を辞した理由について

さて、徳聰氏は在職中の大正 6 年に台湾総督府が施行した文官普通試験に合格しているが、その後官職に就く道を選ぶことはなかった。徳聰氏が公学校の職を辞した理由について継思氏は次のように述べる。

事實はあくまでも経済原理に則っているとみるべきである。教職はたしかに安定しており、人々に尊敬されているが、待遇はとびっきりいいわけでもない。幸い国語学校は普通中学と同等学力が認められているから、それを足場にして雄飛する人

も少なからずいた。もっとも多いのが弁護士試験で、留学するか、独学で試験に参加して資格をとれば、医師並の収入になった。

もう一つのケースは待遇がよりよい職場へ移ることで、製糖会社や電力会社、などの民営の会社や銀行、組合などが選ばれた。最大の誘因は何と言っても待遇であった。漢学の基礎があり、日本語をたたきこまれたこの世代の人は、官庁との接触が頻繁化するにつれて需要が増えたことは否めない。

一方では、家産がある人は社会的地位も高い教職に長く留まって一生を教育現場で過ごした人も少なくないから、差別待遇でやめたとする説は、間違いであると断言できる。

継思氏は父の辞職は「あくまでも経済原理に則つ」たものとする。継思氏は巷間「差別待遇でやめたとする説」を強く否定する。しかし確かに給与待遇をとってみても訓導と日本人教員とは大きな開きがあった。例えば、明治32年の判人官俸給表（注11）によれば、1級75円、2級60円であるのに対し、明治31年の訓導俸給表（注12）によれば、訓導1級45円、2級40円である。また明治39年度の予算配布を検討した資料によれば（注13）、例えば教諭が一人分月額50円75銭に対し、訓導月額16円が算出されている。この明らかな差は、そのほか諸手当、昇級などを加算していけば相当の開きとなる。資格の面でも、台湾人教師はいつまでも訓導の地位しか任命されないのに対し、国語学校出身の日本人は教諭や校長を拝命した。このような差別主義は訓導と教諭の間には横たわっていたであろうが、それが理由での訓導職の辞職は果たしてどの程度あったか、それは継思氏が述べるように定かではない。『台湾教育会雑誌』をみていくと、「現時ノ公学校訓導ニ就テ」（注14）、「訓導諸君に檄す」（注15）、「公学校本島人教員に対する希望」（注16）など、公学校訓導に対する希望や注意が様々記されるが、訓導の辞任そのものを巡っての記述はみられない。どの程度の割合で辞任していったのか、まずはそれを明らかにしなければならない。『台湾総督府国語学校一覧』の大正3年度と大正6年度の資料から、国語学校師範卒業生の在職状況を調査した鐘清漢氏によれば、大正6年以前、台湾人卒業生で3年の義務期限後、離職した者は約15%だが、満5年以上10年以下で約半数が離職し、10年以上になるとわずか三分の一しか在職していないということである（注17）。徳聰氏の6年は平均的な在職年数であったことがわかる。なお、鐘氏は、日本人卒業生に比べ台湾人が非常に離職率が高い理由として、動機、抱負、家庭環境が原因で方向を変えること以上に、「師範教育内容の偏向や、公学校の台湾人・日本人教師の俸給・地位の不平等と、研修・福祉等の面における不合理・不公平等が歴然とし」ていること、「総督府の教師活動に対する制限、社会の変遷、時代思潮の刺激等」を指摘している（注18）。これが、継思氏が強く否定する巷間「差別待遇でやめたとする説」の代表的なものであろう。本資料がこのような課題を考える一つの契機になろうかと考えるが、今後検討していきたい。

- (注1) 山田浩之「英米におけるライフ・ヒストリー研究の系譜－社会学，教育社会学を中心にして－」（松山大学論集 9（5） 松山大学 1997）による。
- (注2) 同上
- (注3) 台湾教育会編『台湾教育沿革誌』（昭和 14 年 12 月）278 頁
- (注4) 同上 276 頁
- (注5) 同上 276 頁
- (注6) 二瓶士治「統計上より見たる公学校教育十年の進歩」（『台湾教育会雑誌』 79 号 明治 41 年 10 月）
- (注7) 二瓶士治「台湾の教育統計」（『台湾教育会雑誌』 58 号 明治 40 年 1 月）
- (注8) （注7）に同じ。
- (注9) 台湾総督府の給費について、莊隆福氏は次のように述べている。

初期の国語学校付属学校の給費生と、国語伝習所の甲科の学生に、食費 1 日 15 銭、補助金 1 日 5 銭を支給したのも、台湾人の子弟に日本語を学習させるべく利益で誘ったものである。反日運動の武力制圧に比して、初期の日本語推進運動は奨励的方式で行われた。（中略）日本当局の 50 年間にわたる台湾統治の方法は、簡単に言えば餌と笞である。（「日本植民地における言語文化政策と台湾への影響」『台湾日本語文学報 9 湯廷池教授退而不休紀念論文集』1996 年 7 月）

統治初期において莊氏の説く日本語の普及のために「利益で誘」うという面はあったかもしれないが、訓導という教員養成システムを軌道に乗せていくための方法として、日本人の就学支援と同じ「餌」を用いたのは、教育施策としては当然であった面もある。

- (注10) 佐藤源治『台湾教育の進展』（台湾出版文化株式会社 昭和 18 年）111 頁
- (注11) 『明治以降教育制度発達史第 11 巻』（龍吟社 昭和 14 年）124 頁
- (注12) 同上 120 頁
- (注13) 一閑人「小公学校の予算配付に就いて」（『台湾教育会雑誌』 50 号 明治 39 年 5 月）
- (注14) 笠井源作（『台湾教育会雑誌』 35 号 明治 38 年 2 月）
- (注15) 蔡培火（『台湾教育会雑誌』 108 号 明治 44 年 3 月）
- (注16) 隈本繁吉（『台湾教育会雑誌』 113 号 明治 44 年 8 月）
- (注17) 『日本植民地下における台湾教育史』1993 年 多賀出版 294-295 頁
- (注18) 同上 295 頁

参考文献

- ・中田敏夫（1997）；台湾における元公学校教師たちによる談話（『国語国文学報』第 55 集 愛知教育大学国語国文学研究室）

- ・中田敏夫（1998）；台湾総督府国語学校生徒執筆「内地旅行日記」（大正元年）（『国語研究』第6号 愛知教育大学大学院国語教育専攻）
- ・中田敏夫・廖繼思（1999）；『台湾教科用書国民読本』「土語読方」部の日本語訳（愛知教育大学研究報告（人文科学）第4号 愛知教育大学）

◎注意

四、關於事項（年代與地點）

(五)

姓名	陳德聰	職別	司庫
籍貫	廣東	年齡	三十
學歷	廣東省立第一中學畢業	經歷	廣東省立第一中學教員
現任職務	廣東省立第一中學教員	備註	

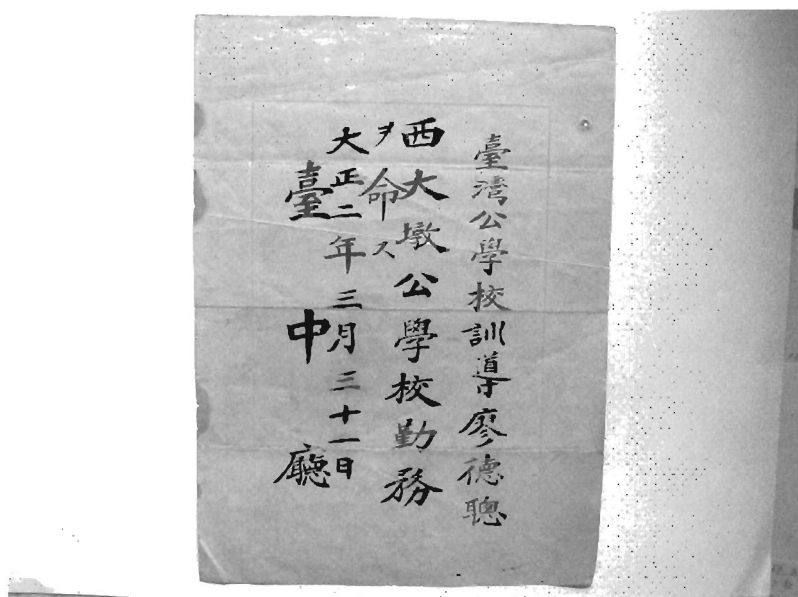
廣東省立第一中學教員陳德聰

紙 用 歷 履

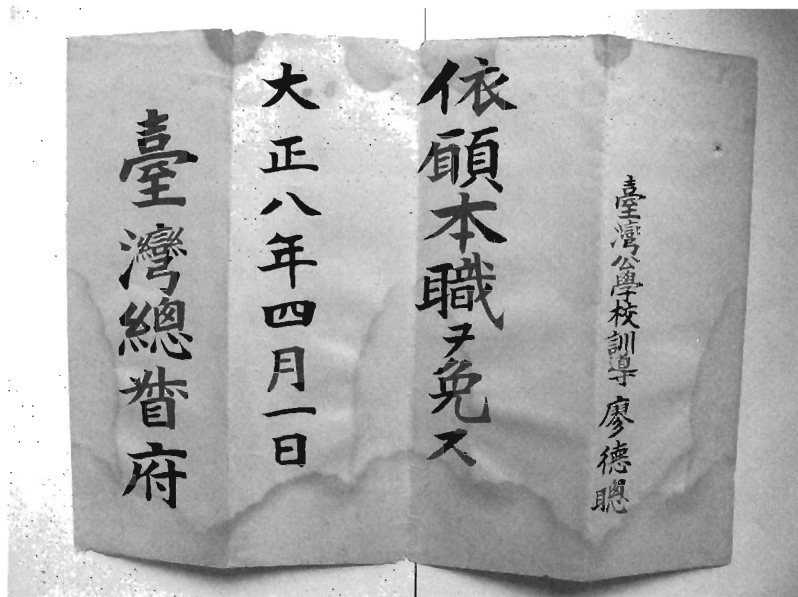
大正八年四月一日	依願書記之免又	同	上
大正十年十月一日	舊記之命又月條四十四日之終又	同	上
大正十一年五月一日	八王山伏工家者壽計會訂主作之命不	同	上
大正十二年六月一日	農務能助弱之命又體桃園建親主佐	同	上
大正十二年直道	依願書記之免又	同	上
大正十四年四月一日	要是在助役之間條六十四日之終又	同	中
大正十五年三月七日	訓讀是之命不	同	中
大正十六年四月一日	外視調查委員之命又迄于三月三十一日之終又	同	中
大正十七年三月七日	新田屋敷地買取之命又迄于三月三十一日之終又	同	中
大正十八年三月一日	依願助役之免又	同	中
大正十九年三月一日	前廣東支度使此旨示下要產物仕賣商經手又	同	中



(写真 3)



(写真 4)



(写真 5)

本文 廖繼思著『徳聰の履歷書』

廖徳聰は1891年（明治24年）11月11日、後に台中廳棟東下堡西大墩頂石碑庄となるところで、廖進財の次男として生まれた。この住所は後に台中州大屯郡西屯庄字上石碑一九四番地となるが、場所はかわっていない。ただし生年月日は旧暦のまま登記した。祖先が卓蘭（現苗栗県）からこの地に移って定住したのが道光6年（1826年）で、三代前だから、ほぼ65年経っていた。生まれたときは清国の民で彰化県の管轄であった。次男だから兄がいたわけだが、20歳前に未婚で亡くなっているので、位牌しかない。

生まれてから1909年までの記録は残っていない。台中廳西大墩公学校を卒業した第一回生として1909年（明治42年）にようやく名前が出てくる（『台中市西屯区西屯国民小学 建校九十周年校慶記念特刊附冊』歴屆畢業生名録簿 民国82年11月12日）。最初の2年は埤雅（現大雅）公学校の分教場で学び、あとで西大墩公学校となったという。この年の卒業生はたった三人だった。徳聰は18歳になっていた。

それから、新設の台中農業試験場で講習を受けたということを話したことがあるが、詳しいことは分かっていない。台湾総督府農事試験場規定が制定されて、台湾人子弟に農業および林業の実業教育の先鞭が付けられたのがこの年だから、公学校卒業後直ちに試験場で講習を受けたのだろう。若いとき胃痛に苦しめられ、ひどいときには阿片を分けて貰ったのんだこともあるが、講習会は全員寄宿生活だったため、規則正しい生活で永年の胃病が完治したというから、講習会は長期にわたるものだったのだろう。つづいて国語学校に入り1913年（大正2年）台湾総督府国語学校師範部乙科を卒業する。国語学校の修業年限を4年とすると講習会の期間は半年または1年くらいだったようだ。

講習會在籍中、皆で頭汴坑（現太平市）へ泳ぎに行ったとき、深みにはまって危うく溺れかかったことがあった。幸い仲間が「辮髮」（べんぱつ）を引っ張って引き上げてくれたので助かった。台湾で辮髮が廃止されたのは、明治43年（1910年）に台湾人断髮会ができて辮髮習慣廃止運動が起こってからだから、徳聰がまだ辮髮をしていた可能性がある。ついだが、大正4年の発表によると、この断辮髮、解纏足運動に参加した人数は121万人に上ったという。これによって、清国の風習の一つが一掃された（以上、末光欣也『日本統治時代の台湾』「断辮髮解纏足運動の実施成果」致良出版社）。

国語学校には合格したが入学するについては、学資という難題が立ちはだかっていた。国語学校は全寮制で学費も官費だったが、やっぱりいろいろな費用がかかるので、ある程度工面しなければならない。祖父は僅かな田地を持っていたが体が弱く、耕作の仕事もできないから大叔父に貸しているくらいで、とても30円という大金は捻出できない。結局一族の祭祀公業から借金してようやく進学することができた。この借金が後々まで後を引くことになるとは、神ならぬ身の考えも及ばなかったことであった。

国語学校での生活は、十分に徳聰の向学心と好奇心を満足させるものであった。同級生はほとんど地方の名士の子弟で、漢学の素養があったから、話も合い友人がたくさんできた。台中地区の同級生は三人いたが晩年までずっと付き合っていた。級友に客家人が多かったのか、在学中に客家語をマスターしている。もっとも、大叔母（祖父の妹）が客家人居住区の東勢に嫁に行っており、親戚との付き合いで客家語を少しかじっていたし、もともと語学に興味があったのも有利な条件だったかも知れない。

国語学校が開校したのは1897年（明治30年）10月20日で、校舎は南門にあった。地方から汽車で台北駅に着くと、大きな行李を抱えているから、人力車で学校までいく。他に地方の学生が集まる学校といえば医学校くらいだったが、国語学校の生徒数が多かったし、全寮制だから学期が始まる前日などは人力車の行列が駅から学校まで続いて壮観だったという。ある年の8月31日、生徒が学寮に帰る日に台風が吹き荒れて汽車のダイヤが乱れたことがあった。デマが飛ぶのは昔も今も変わらず、大安溪の鉄橋が流されて汽車もろとも洪水に巻き込まれ、白い制服を着た学生がガチョウのように濁流の中を流されていたというわさが広がり、祖父がそれを聞いて、居ても立ってもいられず、とうとう雨の中を后里まで確認に行ったことがあった。大安溪の堤防が決壊して列車が洪水の中で転覆したのは事実だが、死者は2名、傷者は14名だった。その日、台北駅に着いたら駅前が水浸しになって、人力車夫が腰まで水に浸かりながら学校まで車を引いて行ったと徳聰は述懐している。

貧乏していたにもかかわらず、徳聰は日曜日になるとよく台北付近の山々を登り歩いた。観音山では霧のため反対側に下りて道に迷ったとか、士林の山には水源地があるとか、いろいろな知識はその時に習得したらしい。そのせいか、それとも、もともと黒かったのか、徳聰のあだ名は「くろ」だった。

国語学校在学中、大正元年（1912年）10月に内地修学旅行に行っており、その手記が残っている。国語学校に在学した唯一の貴重な証拠である。（中田敏夫：愛知教育大学大学院：「国語研究」、第6号、p.30～に全文引用）。

大正2年（1913年）3月25日、台湾総督府国語学校師範部乙科を卒業し、その三日あとには、台湾総督府が授与した台湾公学校乙種訓導の免許をもらった。免許状第791号だった。したがってこれまでにおよそ国語学校開校後16年で乙種訓導を800人も養成したことが分かる。次いで台湾公学校訓導に任じられ、1913（大正2）年3月31日付で、西大墩公学校勤務を命じられる。月俸17円だった。現在の貨幣価値に換算してどのくらいになるか計算のしようもないが、弱冠22歳でこの収入だから田舎では一騒動を起した。あるいは、それが西屯庄で終戦までに20名もの訓導を輩出した要因の一つかも知れない（『いつも一年生』所収「日本語一年生」参照）。

しかし、徳聰に言わせると、夏、冬の文官服を作るし、帽子や皮靴もあつらえるから、そんなに余裕はないという。靴は一足5円くらいしたのではないか。だから、普段は靴を手につげ、学校の近くで足を洗って履いていったものだよと言っていた。

(文官服は台湾総督府が制定した制服。夏は白、冬は黒で、海軍の将校服に似ていた。判任官以上は執務中着用を義務付けられていた。正教員は判任官だから文官服を着用した。ただし、いつ制定されたか不明なので、徳聰が訓導に任官した頃着用したかどうか不明)。

この年の年末、賞与 13 円が支給された。あくる年には賞与が 22 円になり、またあくる大正 4 年には月給が 19 円に上がって、賞与も 30 円になるが、何故か大正 5 年の賞与は 24 円に下がった。翌年も 26 円だった。大正 8 年月給が 22 円になり、賞与を 50 円もらったが、これは依願退職に伴って支給されたものだから退職金も含まれていたようだ。辞令の日付を見ると月俸 22 円の日付は 3 月 31 日、賞与は 4 月 1 日付けである。昇給してから賞与(退職金)を支払ったということだろうか。転勤、昇給ごとに辞令が出るのは当たり前だが、賞与にも一々辞令があるのが面白い。

台湾総督府の辞令はこれで終る。足掛け 7 年(実質 6 年)教員を務めたことになる。

日本領台後 20 年になろうとしていたが、教育事業はまだ緒に就いたばかりとあって、教員の仕事の一部に就学勧誘があった。放課後になると、学齢に達した子供のいる家を訪問して、学校へ行かせなさいと薦めるのである。公学校令によれば、入学年齢は 8 歳から 14 歳までであるが、家の野良仕事の手伝いとかで、学校へ行けない子供が結構いた。第一の関門は学費だった。公学校の国語読本の値段は巻一(1 年生用)では 9 銭だが、巻十二(6 年生後期)では 20 銭になる。それが年に 2 冊だからいろいろな教科書代(修身、算術、高学年になると理科、地理、歴史が加わる)を合わせると何円か要ることになる。現金収入が少ない農村にとっては大きな負担であった。事実、わがクラスにはぎりぎりに入學した同級生が 3、4 人おり、卒業の時は 20 歳になっていたから、1 クラスの中に高校生と小学生が同居していた状態だった。

在職中の 1917 年(大正 6 年)に、徳聰は台湾総督府が施行した文官普通試験に合格している。第 45 号の証書が残っているから、早い方であった。しかし、その後の経歴から、この証書と資格が生かされた形跡はない。官途についていけば、あるいは箔がついたかも知れないが。

1919 年(大正 8 年)徳聰は教職を辞した。国語学校の卒業生で教員の義務年限を終えると、辞職するケースが多い。後の師範学校卒業生にもこの現象があった。論者の中には差別待遇を受けているから耐えられなくなってやめてしまうのだという人がかなりいる。殊に戦後国民党の教育を受けた人に多い。点数稼ぎの言い分としか思えないが、事実はあくまでも経済原理に則っているとみるべきである。教職はたしかに安定しており、人々に尊敬されているが、待遇はとびっきりいいわけでもない。幸い国語学校は普通中学と同等学力が認められているから、それを足場にして雄飛する人も少なからずいた。もっとも多いのが弁護士試験で、留学するか、独学で試験に参加して資格をとれば、医師並の収入になった。

もう一つのケースは待遇がよりよい職場へ移ることで、製糖会社や電力会社、などの民営の会社や銀行、組合などが選ばれた。最大の誘因は何と言っても待遇であった。漢学の基礎があり、日本語をたたきこまれたこの世代の人は、官庁との接触が頻繁化するにつれて需要が増えたことは否めない。

一方では、家産がある人は社会的地位も高い教職に長く留まって一生を教育現場で過ごした人も少なくないから、差別待遇でやめたとする説は、間違いであると断言できる。

教職を辞した徳聰は、村の西大墩信用組合に月給25円に移っている。待遇が3円上がったが、それは形をつけたに過ぎず、入学の時に借りた30円への御礼奉公の意味合いが濃いことが分かる。その仕事が気に入ったものではない証拠に組合では7カ月しか在籍していないで、同年12月1日には、台湾第一の富豪の称があった林本源第一房事務所に就職した。公募に応募したのか、しかるべき人士の推挙を受けて入ったのかついに聞く機会を失ったが、月俸40円、手当て40円という破天荒な待遇だった。ただちに八重山・波の上炭鉱事務所の会計係として赴任した。滞在は1年半に及んだ。その間、母も三つになったばかりの次姉を連れて行ったことがある。しかし、この炭鉱は謎にまつまれており、第一、いまでも機能している林本源第一房事務所に問い合わせても記録がないというし、また沖縄中の炭鉱を踏破して膨大な貴重な記録を残した琉球新報の三木健さんの著書にも現れない（三木健『沖縄・西表炭坑史』日本経済評論社、三木健編著『西表炭坑史料集成』本邦書籍）。

八重山・波の上炭鉱は八重山群島西表（いりおもて）島の「波の上」（地名）にあったはずだが、記録が一切消えているのが解せない。三木氏の調査によれば、当時西表産の石炭はかなり高品質でいくつか炭鉱があったが、タコ部屋式経営で、環境が悪くひどい重労働を強いられていた。徳聰は一年半もいたがマラリアにもかからずに帰ってきたのは奇跡だったというべきだろう。あるいは石垣島にいて炭鉱開設の準備工作をやってただけで採掘を見合わせたかも知れない、と三木さんは言う。

在任中、二つの事件があった。一つは母が乳房炎にかかったのを徳聰自身が治療したこと（医者がいなかった）、もう一つは漂流した福建省の漁民を救助して中国へ送還したことである。中華民国8年（大正8年）冬、福建省惠安県漁民郭合順ら31人が尖閣列島の和洋島付近で漂流していたのを救助して本国に送還したことで、当時の中華民国長崎領事から感謝状を貰った。救助に当たったのは王代勢孫伴（後に石垣村助役）だが、豊川善佐（当時石垣村長）、古賀善次、松葉ロブナストおよび廖徳聰も救援の手を差し伸べているのでやはり感謝状を贈られている。この感謝状は長い間家の正庁に飾られていたが、貝林から台中へ引越しするときに紛失してしまった。西表と石垣はかなり離れているし、徳聰の談話の中にも首里城や清明節の墓参りの状況が度々出ていたから、炭鉱事業の手続きのため石垣に滞在している間にこの漂流事件に係わったとも考えられる。主として通訳に当たったのではないか。炭鉱が全然出炭記録がないのは、許可が下らずに放棄した可能性が大きい。

大正 10 年（1921 年）5 月、台北の本社に戻った徳聰は、会計係勤務を命じられ、次いで 7 月農務係に転じ、桃園租館主任となる。租館とは、林本源の膨大な土地の小作人から小作料を受け取ったり、作柄を査定したり、穀物の保管、販売を手がけたりする出先事務所、月給は 140 円になっていた。30 歳だった。

林本源事務所在職中の大事件は、太平町（現在の延平北路）の拡張であった。

太平町はもともと商店街として栄えていたが、台北から淡水河を越えて南下する幹線道路になるので、それまで永楽町（現在の迪化街）並の狭い道幅だった道路を拡張する必要に迫られていた。当然、地元特に商店主から反対の声があがったが、台北市は強権を発動して強行した。さすが台北第一の商業地区だけあって、その時に新たに建てられた店の多くが洋館形式になり、いまなおかなり当時の面影を伝えている。太平町は戦後のある時期まで、南北交通の動脈的役割を担ったが、間もなく手狭になり、1950 年代後半に開発した重慶北路に譲る。徳聰は為政者の見識の例として、よくこの話をしていた。

前途洋々かに見えたこの時、進学の際に公業から借りた借金が再び顔を出した。村の助役が欠員になったから帰って来いというのだ。収入が半分以下になる。はじめは断ったが、情（じょう）と義にからめての説得と半脅迫でとうとう引き受けざるを得ないはめになった、と徳聰は述懐している。人生の最も輝かしい上昇期に遭遇したこの事件は余程衝撃だったらしく、後年、ことある毎に「干し大根をかじっても情誼にからんだ借金はあるなよ」と子供たちに諭していた。

結局桃園の租館主任は 7 カ月で辞職して故郷に帰り、月給 60 円の助役におさまった。1922 年から 26 年（大正 11 年から 15 年）まで悶々の 4 年を過ぎて今度は完全に臍（へそ）の緒を切るつもりだったのか、ジャワ島東部のスラバヤに近いところで村人と農産物仲買の仕事を始める。しかしこれも事業がようやく軌道にのりかけたとき、祖父の病が重くなってまた帰らざるを得ないことになる。ひとり息子だったこともあるが、4 人の妹が婚期になっており、それも肩の重荷になっていた。

遠くへ行けないので隣村・大雅庄横山の張裕昆堂の書記になる。後に庶務係、会計係を兼任して月給 80 円プラスアルファで食事付き宿舍付きだった。ここには 2 年いたが、祖父が亡くなったので前から来てくれと言われていた霧峰へ行く。1929 年（昭和 4 年）12 月のことである。霧峰の林家一族の会社の管理が仕事だが、会社は東華名産、大安産業、霧峰三五産業など、解任したり兼任したりしているので、辞令からは月給がいくらになるか分からない。約 100 円ぐらいだったようだ。この頃の東京の大学卒業生の初任給が 50 円だったというから、（高峰秀子：「わたしの渡世日記」より）、かなりの高給で、まして台湾ではトップクラスだったらしい。

私は 5 歳になっていた。この間単身赴任で土曜日にしか帰ってこない。それも訪ねてくる人が多くて、父と遊んだ記憶があまりない。霧峰にいた期間がずいぶん長かったように思えたのは、そのせいかも知れない。実際の期間は三年半くらいだった。林献堂氏

らが活躍していた時期で、文化協会の創立にも参画した筈だが、協会史には名前が見つからない。「一新」に掛けた名称、「一心会」の名付け親であり、ハートのマークも徳聰の考案だと言っていたが、まだ若造であったためだろう。文化協会は、政治的な主張のほか、民衆の啓蒙運動も行い、その活動の一つに各地を巡回する文化講演会や啓蒙現代劇（「文化戯」と称していた）があった。記録によると、1923年から1926年の間に800回に及ぶ講演会を催し、徳聰は講師になったり、文化戯の役者として出演したことも度々だった。西屯の劇場で、公学校の学芸会と共同出演したこともあった。その時、わたしは「あわて床屋」を演じたが、徳聰が何を演じたか記憶にない。公学校6年のときだっただろう。すでに1930年代に入っていたが、文化劇はまだ続いていたらしい。

1933年（昭和8年）、徳聰はようやく故郷の組合に主事として迎えられ月給100円を給される。以前の信用組合が組織を拡張して、信用購買販売利用組合になったため、旧式経営者では運営できなくなったのである。殊に利用組合は主役で、農民の粃（もみ）を預かり、いつでも挽いた米と交換できる制度がようやく農民に受け入れられるようになって、精米工場は毎日フル運転する日が続いた。実際事務としては、預かった粃の量を記録した上で入庫し、売るときは、それに歩留まりを掛けて玄米に換算し、更にその日の相場で決済して信用組合の口座に預金すればよかった。預かる粃の乾燥度を規格化し、粃と米の交換比率をあげるなど、従来の殻を破る制度が矢継ぎ早に打ちだされていった。このようにして村で生産する米の大部分が組合に集まったので、一般には「農倉」と呼ばれるくらい、利用組合の地位が高まった。購買部は肥料や農機具の一括購入をはじめ、農具の改善の指導も担当した。販売部は主として米の移出（台湾から内地へ輸出するのだが、「国内」だから移出という）で、移出できるのは三等米（台湾産の米で二等米に合格するものはなかった）なので、いかに三等米を多くするかが腕の見せどころだった。米の等級検査は州から検査官を派遣して行われる。徳聰の方法は、その検査サンプルを別々に保管して三等米に合格しなかった欠陥を研究して改善することだった。わたしが小学6年生になったころ、組合へ行くと、徳聰がピンセットで米をつまんで取り分け、俵らの上皿天秤で計っている光景をよく見かけた。何がどの割合ならば合格するか、科学的に研究していたのである。その努力の甲斐があって、台中州下では西屯と草屯の組合はいつも合格率のトップを競っていて、良きライバルだった。草屯の組合は洪火鍊氏が主事だった。洪樵格氏の父君である。

三等米はもちろん蓬莱米に限るので、西屯は蓬莱米の耕作面積でもトップの座を占めていた。わたしの家では早くから蓬莱米を食べていた。なぜ三等米にこだわるかというと、値段が違うばかりでなく、四等米では移出できないからである。三等米が多い西屯の組合は、従って裕福であり、やり甲斐があったにちがいない。月給も昭和13年（1938年）には120円に上がっていた。だから米が統制になってどんな米も同じ価格という時代になると、徳聰の米に対する情熱は一気に失われていった。そしてとうとう1940年（昭和15年）組合を辞してしまう。辞めた時の月給は135円で、退職金が800円支払われた。

別に主事の慰労金が375円支払われた。履歴表を見ると、組合の時期がもっとも長く、7年に及んでいる。年齢的にも働き盛りの40代だった。

組合時代は、公私共に忙しい、多事の時期でもあった。姉二人を嫁にやり、兄とわたしが中学に上がり、祖母が亡くなっている。年二回の農繁期には、組合員が運んでくる粃の受け入れ、精米、検査、移出などで工場は連日24時間操業に近く、帰るのは大抵夜10時以後だった。犬を追いかうためにいつも鹿の角の柄が着いた杖を持ち歩いていた。その杖は未だに手元に置いてある。また集落に共同の飲食用の井戸を掘らせたり、便所を造る助成金を奔走したり、電灯を引いたり、一族の生活改善の指導にも当たっている。

しかし、もっとも大きな事件は、1938年（昭和13年）秋、従軍通訳として召集されたことである。表向きは、広東戦線へ通訳のために200人余の客家語が話せた人を召集したことになっているが、客家人の中でほとんどただ独り福老人（福建系台湾人）だった。国語学校時代に客家語を覚えたのが、なぜか軍部に分かっていたのである。戦地では大隊長付き通訳になったが、最前線にも出動し、弾が飛び交う音も経験しており、大砲の砲弾が開けた穴に隠れたこともある。当時、兵士の間では砲弾は同じところに二度落ちる事はないというジンクスがあるそうだが、それも対アメリカ戦では通用しなかったことだろう。最北は徒化（県所在地）まで行ったが、村人が避難して無人になった家々に「此家已被搶三次」（この家は三度略奪された）とまじめに張り札しているのが哀れでもあり、おかしくもあったという。4カ月くらいで召集解除になったが、幸い怪我人もなく、全員無事帰還した。ただ、客家語と広東語は似てはいても完全に通じるわけでもなく、その分は漢字の筆談と持ち前の語学力でカバーした。出征に際して、母の父親つまり祖父が特に戒めた言葉が徳聰の回顧文にある。「通訳で間違えるとその人の生死が別れることが少なくない。この点常に心せよ」と（徳聰草稿『従軍感想記録一』未公表）。

47歳になっていたから、普通ならすでに兵役免除の年で召集されたのは、たしかに大事件だった。一族の人がほとんど集まって壮行会をした写真、近親だけで撮った写真などが残っている。貴重な映像である。徳聰の分析によれば台湾人の召集に対する反応を観察するための作業だったにちがいないという。

この時期、なぜか家には常時居候がいた。叔母が子供二人を連れて実家に戻っていたのを手始めに、友人が南洋へ行ったので子供を預かったり、親戚の娘が娼家に売られそうになったのを匿ったり、叔母の子供が西屯公学校で受験勉強をするために寄宿したり、子供心にもいつも他人が家の中に居た感じだった。しかし母は、自分の子供同様に食事を供給したり、洗濯したり、遊ばせたりしていた。食い扶持くらいはもらっていたのだろう。

組合を辞めた徳聰は、なぜか大東信託（後に華南銀行に合併）の嘱託に就任し、企画部および不動産信託部主事取扱になった。月給100円プラス手当て50円プラス宿舍料

20 円、計 170 円という高給である。社長（頭取）陳欣とは米穀協会を通じての知己ではあったが、不動産評価の実力を買われたのかもしれない。ただし、ここには 4 カ月しかいなかった。

村の名家の出身で、日本占領下の北京市政府の秘書をしていた人が、北京に中央卸市場を設立する案を持ち込み、德聰が適任だといってしきりに薦めていた。あまりにも大きなプロジェクトなので、躊躇し言を左右していたが、とにかく一度現場を見てはということで北京へ渡った。それが多分 1940 年（昭和 15 年）の夏だったようで、そのため折角高給で入れてくれた大東信託を辞したのだろう。しかし、北京に着いて、その計画があまりにも杜撰であることが分かったので、仕事は断ったがわざわざ北京まで来たのだからと、市内見学をしていた。長い間一生懸命働いて、思いがけなく暇ができたのだから旅行好きの性格が頭をもたげたのだろう。古本屋街や名所古跡をうろつき回っていたある日、街でぱったり旧知の三井物産の元台中支店長に会った。彼は天津支店長になっていた。北京へ来た経緯を話しているうちに、実は軍の委託で米を買い付けているのだが、検査が出来る人がいないで困っている、しばらく指導や検査の実務など手伝って欲しいかということになった。思いがけなく臨時嘱託になり月給 300 円もらうことになった。当時大陸と日本国内間は等価で 1000 円まで送金できたから、棚から牡丹餅のような話だった。あのとき勉強した米の検査技術がここで役に立つとは意外だったが、何でも機会があれば習って損はないという德聰の信条を地でいったような出来事であった。しかし、国外にいと国内では分からなかったいろいろなニュースが入ってくる。どう見ても日米が開戦するのは時間の問題だ。北京在留の欧州やアメリカ人が連日家族を本国へ送還している。開戦したら台湾へ帰れないかも知れない、家族が困ると判断して、折角の高給を捨てて帰国することに決め、12 月 31 日で辞職した。（予測通り、台湾に帰って丸 1 年後の昭和 16 年 12 月に太平洋戦争が勃発した）。

支店長も残念がったが、本人も心残りだったと述懐している。3 カ月分の給料は 1000 円未満なのでそっくり送金することができた。台湾ではほぼ 1 ケ年使える。

北京から帰ると間もなく見知らぬ人が時々訪ねてくる。雑談しては大笑いするだけで、一体何のために訪ねてくるのかと聞くと、あれはいわゆる特高（注：特別高等警察、思想担当）で、大陸から帰ったから、思想動向を探りに来たのだという。はじめて見た悪名高い特高だが、普通の人と何ら変わりが無い、あれで分かるのですかねえという、雑談から何の気なしに言った言葉をつかまえて追求するのが彼らの常套手段だと注意された。問題はないと分かったのか、訪ねてくるのが間違った代わりに、バス会社の支配人になって欲しいかと熱心に訪ねてくる人がいた。これも統制が厳しくなって難しいとみたのか、あるいは待遇が折り合わなかったのか、この話は立ち消えになった。

余談だが、德聰の本棚に長いあいだ見慣れた立派な本があった。インドネシアから持ち帰ったジャヴァ島の精密な地図である。それが、私が戦後帰ったときにはなくなっていた。あの本どうしたのですかと聞いたら、「なあに、あの特高連中ちゃんと見ていたよ。

太平洋戦争が始まる前に家に来て『あの本を貸してください』、といって持っていったよ。それっきりさ」との答えだった。

徳聰自筆の履歴書はここで終わっている。美濃紙に毛筆で書いたもので、書き込みや訂正箇所もあるから草稿の控えであろう。何のために、何処へ提出するために書いたのか、いまもって分からない。すると、北京から帰ってから終戦までの約5年、何をしていたか詳細なデータがない。叔父か、もっと年配の人に聞けば分かるだろうが、その人たちはもう誰もいなくなった。皇民奉公会（台湾版大政翼賛会）にいたが、その支部は昭和18年末に成立して、20年7月、終戦を待たずに解散している。全期間に職したとしても、昭和16年から18年まで（1941 - 43）の3年間が分からない。上石碑の集落は、飛行場に近いので取り壊されて街の借家に住んでおり、爆撃が頻繁になると田舎に疎開している。兄の薄給があったにしても、わたしの学費を送金しなければならなかった。単純計算でもかれこれ2000円は使ったはずで、集落を追ひ払われた補償金がそのために消えた可能性がある（もっとも太平洋戦争も終わりに近づいた1945年（昭和20年）の4月頃に函館から1000円電報送金したことがあったが、その中には弟の分も入っていた）。今となっては聞きようもない。戦争中ずっと一緒に住んでいた妹の話では、疎開先は川の脇にあって魚やシジミがよくとれたし、野菜は自給できたから、少ない給料でも何とか食べるには困らなかったという。

一方では村の警防団長を兼任させられ、警報が鳴ると台中からボロ自転車で西屯まで戻らなければならなかった。

かくして終戦を迎える。永年庄長（村長に相当）を務めた人が引退したあと、制度が変わって台中州が台中市と台中県に分かれ、西屯庄が台中県大屯区西屯郷になると郷長に推された。1945年（昭和20年；民国34年）のことである。県下の会議で、徳聰は北京に半年ほど居たので北京語で発言できたのを認められたのか、能高区長に任命された。学歴も十分だったが、1946年4月であった。

旧台中県には山地を含む区が三つあり、北から東勢、能高、新高とあって、能高区は埔里鎮、国姓郷、仁愛郷を管轄する小さな区である。仁愛郷は戦後新たにできた山地の郷で、霧社を含む。

後に台中県は台中県、彰化県、南投県になり、区は廃止された。

埔里は台湾の膺に当る地理的中心で、盆地なので、台風が来ないし夏涼しく冬は暖かい。何よりも気候がよくて、蚊がいない。母は蚊帳がいらなないので一番気に入っていた。区長になって、車がついた。運転手付きである。ただ、道路が悪いので交通はやや不便で、台中まで3時間かかるのも珍しくない。乗用車はデフが低いので、トラックの車輪が掘り下げた道路でよく引っかかって動かなくなる。運転手はだいたい苦労したようだ。それでも埔里在住の同級生は、以前台中へ出るのに集集廻りで半日も掛ったというから

大きな進歩であった。

埔里から霧社へ、さらに奥地の山地へは、わたしも区長の巡視について、一緒に行ったことがある。

この静かな別天地の平和を破ったのは、1947年2月28日台北で発生した事件が3月12日に埔里まで飛び火してからだった。大陸から派遣してきた白崇禧軍が上陸して、台中の民兵が埔里に入り、区公所へ来て銃器庫を接收するという。徳聰は、「わたしはこの行政責任者だ。銃を渡すわけには行かない」と断り、しかし、脇を向いて「もっとも、銃を破壊されて奪われたのならどうにもならないが」と独りごとを言った。連中もよく意を体して銃を壊して銃を奪って山の方に行った。平静に復した後、1947年7月区長を辞して帰る。区長の期間はわずかに1年ちょっとであった。徳聰はこのことで、「官」がすっかり厭になり、その後再び官途につくことはなかった。

台中に戻った徳聰は、旧友に推されて精米工場をはじめたが、世の中は大きく変動しつつあった。政府はインフレ対策の一環として、公務員に給料のほか米や食用油などの生活必需品を配給したので、それを扱う米屋に多くの業務をうばわれた。またその統制機関として糧食局を設立して米の買い付けに介入してきたので、民営の米屋は益々窮地に追いやられる。その間、シャトル工場の支配人を兼任したあと、1948年8月、私立商業学校の校長に就任した。この学校は1931年4月に創立した3年制商業学校で、簿記と珠算を中心に第一線の商業実務者の育成を趣旨とした。創立理事には霧峰の林氏をはじめ台中付近の名士が名を連ねている。公立中等学校の不足を補う学校として歓迎されていた。初年の募集50名に370名の受験生があったので第二年には定員を100名に、更に翌年には150名に増加している。三年制ながらバレーボールが強く、台中州下の大会で連続優勝三回という成績をあげている。卒業生は中部に分布し、金融界や実業界で重用されていたが、戦後正規の商業高校にする必要に迫られていた。徳聰と理事たちは旧知の間柄であったからそれで引張り出されたのだろう。

徳聰はよく「私立学校の財源は生徒が納める学費と理事その他の寄付金だ」とっていた。空前のインフレで学校も経済界も疲弊の極にあった時期、学校の経営は困難を極めた。校内でカマスを生産したり、実習商店を設けて販売するなど、多方面の財源を開拓したのもこのころであった。1949年のデノミで貨幣価値が安定してから、経営も徐々に軌道にのるが、徳聰は50年のはじめに辞職している。念願の高校認可は52年に達成した。

1950年、台湾最初の県長、市長選挙が行われた。台中市は3人の候補者で争われた。国民党公認の他は無党派で、内一人は同郷の出身だが、はじめから問題外で、あと二人の一騎打ちだった。その選挙にどういう経緯でか、徳聰が無党派の候補者楊某の選挙事務総責任者になった。はじめての選挙で手探り状況の中、事務局もなく、家から指揮をとっていたようで、市民の国民党に対する反感を利用して当選させたが、楊氏は就任後

まもなく国民党に入党したので、折角の市民の反抗も水泡と消えた。その後、非国民党員が台中市長に選ばれたことがない。選挙期間中、家には連日各種の客がたむろしていた。それぞれ勝手な気炎を吐いていたのであまり印象がないが、母と家内が毎晩お茶を淹れるのに忙しかったことだけ覚えている。

楊氏が市長当選後国民党に入ったことで、徳聰は選挙にも失望し、その後選挙にタッチすることはなかった。

この年徳聰は、叔父が支店長をしていた無尽会社の員林支店の代理支店長に任命された。叔父が些細なことで保安司令部に拘留されたためである。拘留が長引いたのでそのまま支店長になる。ただその時、学校と会社の二者択一を迫られて無尽会社の方を選んだ。当時はまだ確立した人事制度がなく、社長の一言で決まったようだ。員林在職期間は、徳聰にとって悠然としたものであったようだ。母と二人で支店の隣の社宅に住み、台中のように夜訪ねてくる人もなく、大抵は本を読んで静かに暮らしていた。業務については、本来の研究心を發揮して、瞬間に丁級から乙級支店にしてしまった。大都市の甲級支店への転勤を打診されたこともあったが、老齢を理由に辞退している。

この職場は在勤 10 年に及んだが、その間三度も入院している。一度目は胆嚢結石で、その痛み方は今まで見たこともない激烈なものだったので、手術に踏み切った。切取った胆嚢から一、二センチ大の結石のほか、死んだ回虫が見つかった。次はある年の肺炎で、これは台中で入院した。最後は大腸がんの手術だった。しかし手術時すでに手遅れで、人工肛門を付けることしかできなかった。担当の医師が、便秘、下痢、血便という典型的な大腸がんの症状を見逃して細菌性下痢として処置していたので手術の好機を失ったためである。それでも手術後なお一年平常通り執務して、台中の自宅に帰ったのは亡くなる一カ月くらい前だった。話好きの徳聰も、体の衰えからか、あまり話をしなくなったが、見舞い客がくるといろいろ笑わせていた。一度だけ、叔母の夫が来た時、「君を見るのはこれが最後だろうなあ」といって涙をぼろりと流した場面を見た。最後の数日は上の姉とわたしが交代で夜の看護をしていたが、わたしがちょっとまどろんだ間に、姉に手をとられて息を引き取った。

1962 年 1 月 31 日の夜中であつた。

徳聰が多分他の誰にも話さなかったことが二つある。一つは、台中に進駐した軍隊が、埔里にいる（と思われていた）謝雪紅を討伐するために、徳聰に道案内を命じたとき、わたしを呼び寄せて後事を託したときで、

「わしは大陸での従軍や北京での見聞で、この連中がどんなことをしでかすか予測できないことを知っている。これから彼等を埔里へ連れて行くが、きっと先登に立たされるだろう。埔里の市民を戦闘に巻き込まないのが先決だから、出来るだけのことはするが、万一ということもある。それだけは覚悟しておくように」

と言付けたのである。

予想通り、埔里に入る手前の烏牛欄橋で戦闘があった。軍の兵士が二人戦死している。それを付近の農民が丁寧に埋めたことで、大陸からきた兵隊が感激してもらった言葉がある。「大陸各地で戦争したが、戦死者がこんなに丁寧に葬られたのははじめてだ」

辛い短い戦闘で終わり、山の方へ退去したので埔里の街は何事もなく平穏を取り戻した。

もう一つは、彰化銀行から客家語に詳しいから苗栗支店長に行ってくれないかと要請されたことであった。彰化銀行はもともと台中や彰化の系統で客家語が出来る人がまだ育って居ない、苗栗支店は開設間もなくであり、基礎を固めるにはうってつけの人材だと思われたのだろう。それが都合が悪いのなら、調査部長はどうかと打診されたのである。インフレが進む中、銀行の貸付の担保は不動産、特に土地が好まれた。が、土地の評価はかなり難しい。調査部はそのような担保物件の評価もする部門で、土地に詳しい徳聰が選ばれたらしい。当時の彰銀の幹部は霧峰林家や大雅の張家など、知り合いが多かった。しかし、徳聰には引き受けられない事情があった。わたしはもう年だからと辞退した。本当の理由は私にだけ話したが。

徳聰は座談の名手であった。話題が豊富で、記憶がよい上に、手ぶり足ぶりを交えて語るので、周りはいつも聞き手で溢れていた。夏の夜などは夕涼みを兼ねて夜が更けるまで話が続いていた。そんな時、母は一晚中コンロで湯を沸かし、お茶をいれていたものである。無声映画時代、学校の校庭でよく露天映画会が催されたが、臨時弁士を務めるくらいできた。この才能はわたしの代には伝えられていない。大叔父がよく「お前等の分まで徳聰が話してしまったのだろうよ」と言っていたのを思い出す。今にして思えば、オーラルヒストリーとして整理して置くべきだった。

もう一つの特技は「揚琴」であった。この楽器は独奏にも合奏にも適しているので、旧正月には、従弟のバイオリン、弟の横笛、私のハーモニカなどで新年演奏会を開いたものである。「揚琴」の演奏は、今、甥に楽器もろとも伝わっている。

履歴書から、徳聰がこごぞというところで、外部の原因で折角の機会を度々失っていることが分かる。ただ、徳聰本人はくよくよしない性格だったから、その度に拾ってくれる人が現れて難関を切り抜けている。結論からいうと、金持ちにはならなかったが、食うには困らなかった、ということになる。

2007/04/07

(なかだ・としお 本学教授)

(りょう・けいし 翻訳業)